

# たかさし 史話 57

## 三菱製紙の工場進出

山電高砂駅前で操業を続ける三菱製紙は、高砂の工業化のさきがけとなった企業です。この地に工場を移し、操業を開始したのは、今から百年以上も前の明治三四年（一九〇一）のことです。

それまでは、神戸市内に工場があり、神戸製紙所と称していました。いまではすっかり繁華街となっている三宮に立地していました。しかし、付近の市街地化が進み始めたことや、製紙に必要な用水の確保の点などから、移転が検討され始めました。

高砂の地が選ばれたのは、水量豊富な加古川に面している取水が容易なことや、播磨灘に近くて排水にも便利なところが大きな理由だったようです。また、町場を形成していた高砂町に近く、労働者を確保しやすいという点も、理由の一つにあげられていました（『三菱製紙百年史』）。  
こうして、当時としては巨

大な工場がこの地に出現し、近代的な洋式機械も導入されて、操業が始まりました。その際、用排水をめぐっては、付近の漁民や農民との間で問題が起きています。

一つは取水の問題です。加古川の取水口から塩水が流入することを防ぐために、防潮堰を築いて川をせき止めたところ、魚の往来を妨げることになって漁獲高に影響するとして、漁民との間で問題となりました。

また、排水をめぐっても、農作物や魚介類に影響があるのではないかという声が寄せられるようになりました。このため、高砂町当局によって排水路を整備する工事が行われたりしています。工場と住民との間にあつて、町当局としても、いろいろと対応に苦慮したようです。

こうした動きは、当時の新聞にもたびたび報じられたほか、国会にも請願書が出され

るなどして世間の注目を集めました。国から調査のために派遣された技師による復命書が、国立公文書館に残されています。

大企業の進出と地域社会との関係は、これ以降、現代に至るまで日本のあちこちで問題となることがあります。高砂では、明治中期というきわめて早い時期に、企業と地域との共存共栄がいかにあるべきかという課題に直面していたわけで、これ以後日本の各地が経験することになる問題が、先駆的に現れていたと言うことができると思います。

高砂市史編さんの過程では、右にあげたような新聞や文書を集めるだけでなく、史料として用いながら、工業都市高砂の近代史を、企業・住民・自治体の三者の視点から描いていきたいと考えています。

（市史編さん専門委員

松下孝昭）